

『動詞の意味論的文法研究』 概要書

森田良行

第一章 総説

「あとがき」にも述べてあるように、語の意味（語義）・文の意味（文義）は、その語の文構成にあずかる働き、つまり「文法」と密接な関係を持つており、文法は語の意味・文の意味を支配すると同時に、また意味によつて支配されている。両者は盾の両面と言わなければならぬ。特に動詞は、述語として物語り文を作り、動詞文型としてのさまざまな文法的特色を生み出している。動詞こそは、日本語における表現形式のもっとも中核に位置する重要な語であると言つてよいであろう。本研究は、このような文構成において動詞の担う意味・文法上の役割を研究対象に据え、「意味」と「文法」との有機的關係を抑える視点から、動詞ならびに動詞を中心とした周辺の諸問題を分析記述することに目標を置く。

1、語彙・文法から見た動詞の特色

総説であるから、第二章以下の各論で論ずる諸問題・諸現象の基となる「動詞」の一般的な諸相を概観するにとどまる。ここではいちおう語彙論・文論・意味論の各面から日本語動詞の特色を眺め、最後に意味と文法との關係についておよそのところを予告する。詳しくは第二章以下で詳論する。扱った小項目は以下の通り。

一、語彙量から見た動詞

四、意味から見た動詞の分類

二、語種・語構成から見た動詞

五、意味と文法との關係

三、文論的機能から見た動詞の特殊性

当然、五の「意味と文法との關係」が本研究の中心的テーマであるが、ここでは動詞の表す格支配の機能に視点を据えて、それが動詞文型を形成する過程、ならびに各動詞の文

脈中での「個別的意味」と密接に繋がる様相を簡単に紹介する。

第二章 動詞の文型と意味

この章では、主として動詞の格支配と意味との関係、それも動詞の意味ごと取る「格の組合せ」をその語の「動詞文型」と考え、語の個別的意味が文型とどのような因果関係にあるかを追究する。1・2は総論として動詞全般を見渡し、3・4で特に著しい特徴を示す移動動詞「行く」「来る」、および「囲む」について見ていく。ともに動作的意味と状態的意味とを持つが、「囲む」において、その状態的意味の折、取る文型的特徴ならばに意義素性の偏りについて観察する。5では、4の論議を受け継いで、動詞の動作性と状態性との差にスポットをあて、状態的意味が取る格支配の劣化、ならびにそれぞれの格に立つ名詞句の意味的特徴の違いについて論ずる。6は最近刊行された『日本語動詞用法辞典』について、書評として、以上に述べた格支配・動詞文型の諸問題を考える観点から、その長短を論じたものである。

1、動詞の文型と意味について

動詞がその意味内容から当然要求する事柄——主体や対象・相手・結果・内容・場所・手段・方法等——を、格との関係で分析し、主格や相手格・目的格・結果格・場所格などその組合せが述語動詞の表す「意味特性」と深い関係にあることに注目する。さらにそれらの格成分が、より状態的なものから動作的性の強いものまでさまざまで、その組合せから動詞の格支配が意味に階層性を与えている点に注目する。最終的に格支配のパターンから

動詞語彙の意味類型を帰納し、動詞の意味分類と動詞文型の分類とを重ね合わせることに成功した。扱った小項目は以下の通り。

一、意味記述の基本

三、格支配と意味の階層性

二、語義と格支配との関係

四、動詞文型の分類

2、動詞における格支配と意味

ほぼ前章1を受け継いで、動詞の格支配の組合せが述語動詞の個別的意味を規定し、組合せの複數化、つまり文型の拡張に応じて動詞の意味が抽象から具体性へと進行することに注目する。従来語義研究は意味の拡大や縮小、移行、派生などの史的変遷にのみ注意が向き、このような格支配との関係性についてはあまり顧みられていなかった。ここでは最も格支配の著しい移動動詞「行く・来る」に注目し、文法と意味との関連性を視野に入れた「意味分類の方法」を打ち立てた。最後に基本語動詞九十二語を取り上げ、その格支配のパターンの抽出と語義分類とを整理し纏めることに成功した。扱った小項目は以下の通り。

一、格支配と文型形成

三、格支配に基づく意味分類の方法

二、格支配と意味の移行

四、格支配に基づく基本語動詞の意味分類

3、移動動詞「行く・来る」の意味

「行く・来る」のトコロ性移動を、表現主体・移動主体・移動の起点・到達点の四面からその在り様を分析分類し、かつ表現時点と移動時点との時間的關係を重ね合わせて「移

動」の意味を検討する。そこから、表現主体が移動主体の移動時点・移動場所に観念的に転移して、「行く・来る」の語彙選択を行なっている実態を観察した。この「表現主体の観念的転移」の観点を、意味分析・文法分析の作業に導入することがきわめて有効であることを実証するとともに、広く意味論・文法論・文章論の分析作業に有力な理論的方法を提供することは、前著『言語活動と文章論』において証明済みである。

トコロ性移動の「行く・来る」が時間的移行・状態変化へと移行し、さらに移動・移行の具体的意味から単に行為作用の成立の在り方を示す抽象的なアスペクト性へと変じていく。しかし、その底には、表現主体と移行変動対象との関係の在り方が基本となっていることに注意を向ける。なお「行く・来る」のこれら意味・用法の移行が、格支配に基づく文型と深くかかわりあっていることは、前節に述べた通りである。本節で扱った小項目は以下の通り。

- 一、「行く」「来る」の基本構造
- 二、移動表現における二つの型
- 三、場面による「行く」「来る」の使い分け
- 四、意味変化における「行く」「来る」の使い分け
- 五、「行く」「来る」の移動性からアスペクト性へ
- 六、補助動詞「いく」「くる」の分類

4、動詞「囲む」の意味するもの

前節で主体の場所的移動を表す移動動詞を眺めたので、本節では、対象との関係においての動き「囲む」を中心に、その意味特性の諸相が格関係とどのような関わりを持つかを観察した。「囲む」は、対象を取り巻く動作性から、動作の結果としての取り巻き状態、さらに囲む形の主体・対象間の状態性まで、意味の幅が広いが、それらはすべて「囲む」の取る文型的特徴、特に受身、「テイル・テアル」のアスペクト面、「たう」連体修飾用法などと連動しており、文型形成が個別の意味を左右する。しかも、個別の意味の意義素規定の条件がそれら文型の差とかわりあっていることを発見し、意味と文法とは一体のものであることを主張する。扱った小項目は以下の通り。

- 一、「囲む」の文型と意味とのかかわり
- 二、動作性「囲む」の意味条件
- 三、状態性「囲む」の意味条件
- 四、意味規定の条件移行

5、動詞状態相の諸問題

同じ動詞でも、その位置する文脈により、動作性から状態性まで幅があることはすでに「行く・来る」「囲む」の分析で見えてきた。ここでは広く動作性動詞一般に対し、その取る格の組合せ、格文型によって、動作性から状態性へと移行する姿を、意味と文法との関係という視点から概観する。その結果、動作動詞の状態化の諸相が明かとなり、本来の状態性動詞とともに、動詞一般の状態の意味にどのようなレベル・種類があるかを理論的に演繹し、分類した。扱った小項目は以下の通り。

- 一、語義と結合価の関係
- 二、状態の意味における格支配
- 三、状態の意味を生む文法条件
- 四、状態の意味と語結合との関係
- 五、動詞状態相の分類

6、『日本語基本動詞用法辞典』について

ここでは、平成元年三月に刊行された小泉 保ほか四名の編になる『日本語基本動詞用法辞典』について、特にその編集の基本方針である動詞の格支配に基づく動詞文型のたて方、それと述語動詞の意味との関連、さらにそれぞれの名詞格に立つ語の意味特性のとらえ方・分類方式など、意味分析と文法分析との総合的見地に立って、その分析ならびに記述の在り方を学術的に検討した書評である。扱った小項目は以下の通り。

- 一、はじめに
- 二、全体の構成
- 三、見出し語について
- 四、意味・文型の扱いについて
- 五、意味特性の指示について
- 六、むすび

第三章 動詞の自動性と他動性

この章では、動詞の自他の類別が、動詞語彙そのもの、および動詞を含む文型（ガ格・ヲ格を伴う動詞句、ボイス・アスペクトとの関連）において意味とどのように関係しているかを分析し、意味・文法の相互関係による動詞句分類・語彙分類がどうあるべきかを論じ、かつ実際に行ったものである。

1、動詞の自他に関する諸問題

はじめに動詞をその自動性・他動性の観点から、形式・意味・文法の各面における特徴を概観し、第二節以下の各論の導入となした。扱った小項目は以下の通り。

- 一、自他弁別のむずかしさ
- 二、形態から見た自他の問題
- 三、文型から見た自他の問題
- 四、意味から見た自他の問題
- 五、文法から見た自他の問題

2、ヲ格を要求する動詞の問題

日本語の動詞は自他の弁別が難しいと言われる。一般に動作対象をヲの格で取るものを他動性の動詞と考えている。ここでは自他に関係なく、ヲ格を取る語をくまなく見渡し、ヲ格に立つ名詞句と述語動詞との意味関係から、分類を行う。また、一般にヲ格を取ると言われる動詞や、他の格を取るべき動詞における格助詞のゆれ現象に目を向け、ヲ格がもたらす動詞の意味、および自他との関わりについて考える。扱った小項目は以下の通り。

- 一、問題提起
- 二、ヲ格と言われている自動詞の分類
- 三、ヲ格を取ると言われている自動詞の特徴
- 四、他動詞におけるヲ格の意味
- 五、“ゆれ”と誤用の境

3、動詞テアル文におけるガ格とヲ格の問題

補助動詞「ある／いる」が動詞に伴って「動詞・テイル」「動詞・テアル」文型を作るとき、その動詞の意味および自動性・他動性の別に応じて、ヲ格・ガ格の使い分けが行われる。一般に「テアル」文型はガ格が本来で、ヲ格を用いるのは誤用と考えられている。ここでは「くヲ動詞テアル」文型が、文義論的に「結果の蓄積」を意味する正しい日本語であることを論じ、「くガ動詞テアル」文とは表現的意味の違うことを実証する。意味論的文法研究によって、「くヲくテアル」形式に市民権が与えられたと言つてよい。扱った

小項目は以下の通り。

- 一、「てある」と「ている」
- 二、「がうてある」形式の表す意味
- 三、「がうてある」形式の不可能な場合
- 四、結果の蓄積「うてある」形式
- 五、「をうてある」文型の成立
- 六、「がうてある」と「をうてある」の交渉
- 七、むすび

4、動詞テイル・テアル文における受身の問題

テイル・テアル表現は、その伴う先行動詞の自他に応じて、使い分けがあることは前節において論じたとおりであるが、文中にあつては、各文脈の表現的意味に見合う形で、自他のいずれか一方のテイル・テアル表現を要求する。しかし、すべての動詞が自他両方の語をペアで揃えているわけではないから、他動詞にラレルを添えた受身形にして自動詞相当の表現的意味を生み出す。その結果「動詞＋受身テアル／テイル」文型が現れ、「動詞＋テアル／テイル」文型と競合する形でさまざまな動詞文を作る。ここではその文法的相違を述語部分の意味構造の面から分類し、多くの用例より帰納した結果として、各文型間で相互に入れ替え可能な方式の在り方から全体を四種の類型に分類する。その結果が各テイル・テアル文型の表現的意味とびつたり合致することを突き止めた。意味論的視野からの分析が文法研究に有効な理論を提供することの一つの証明と言えよう。扱った小項目は以下の通り。

- 一、はじめに
- 二、受身テイル・テアル文型の分類
- 三、第一種形式の意味特徴
- 四、第二種形式の意味特徴

- 五、第三種形式の意味特徴
- 六、第四種形式の意味特徴

- 七、各形式の意味特徴の差
- 八、受身テイル・テアル文型における意味の移行

5、和語自他両用動詞の諸問題

動詞語彙が自他の用法面で必ずしもペアで二つの語を揃えているとは限らぬことは前節で触れたとおりである。その結果、自動詞なら使役形にして他動詞相当の表現的意味を、他動詞なら受身形にして自動詞相当にと、それぞれ欠けた部分の用法を補う形の便法が講じられている。ところが、日本語の動詞文は意味的には必ずしも自動性・他動性の差は明確ではなく、表現上は自他の使い分けにはゆれが見られる。そこから、一つの語形態が用法上、自他の両形式に現われるという現象がまま見られる。自他同形語、つまり自他両用動詞の始まりである。本節では、両用動詞を意味論的観点から対応のパターンを整理し、分類の基準としたものである。扱った小項目は以下の通り。

- 一、動詞の文型と表現的意味
- 二、自他両用動詞を生み出す要因
- 三、自他両用動詞の種類
- 四、自他両用動詞の意味パターン
- 五、むすび

6、漢語サ変動詞の自他に関する諸問題

漢語は語史的には借用語の一つであり、和製漢語も、語構成・語構造の面からは「外来語」の視点で眺めなければ、その文法機能は十分に記述できない。特に文中にあつて、文法的役割を担うにあたっては、和語「する」の助けを借りて動詞としての機能を持つこ

とになる。その結果、漢語動詞は自他の区別が本来的に備わっておらず、語義内容から自他の役割分担が決まるといった意味中心の運用に流される。漢語は二文字熟語が圧倒的に多いから、その二つの語の意味関係が全体としての熟語の意味に、自他の弁別上重大な影響を与える。ここでは、このような観点から、漢語の自他の使い分けを用例から帰納し、意味論的に理論づける。意味が文法を左右する最も顕著な例が、この漢語の自他の使い分けである。扱った小項目は以下の通り。

- 一、現代語における漢語の造語方式
- 二、漢語と品詞性との関係
- 三、漢語における自動詞・他動詞の問題
- 四、漢語における自他のゆれ
- 五、漢語の語構造から見た自他の問題
- 六、むすび

第四章 動詞の語義結合

この章では動詞の語義結合を、語彙レベルの複合から、句・文レベルの慣用句・慣用表現にわたって、広く眺めた。従来、複合動詞と慣用句とはまったく無関係な形態として、双方を共通の土俵で論ずることがなかった。しかし、意味論的にその文法機能を眺める立場に立てば、複数の意味単位の結び付きという両形態には、極めて類似の共通点が多い。所詮、複数単位の複合は、意味結合以外の何者でもないのであるから。そこで、“意味の結びつき”という観点から、複合語と慣用句の実態を分析し、両者をそれぞれ、結合面での意味論的差異に基づいて、結合度の強弱、ないしは意味総合における階層性を計り、各形式の分類を行った。

1、動詞の語義結合の方式

語義結合を、その本義ないしは転義に基づく複合もしくは句結合として、それらをベースにした諸形態の関連性について、図示して解説した。

2、動詞の複合における意味構成

まず初めに、語彙論的見地から、複合動詞の実態をひとわたり眺め、次に複合要素の自立性を意味論的見地から分析して、複合の意味関係と複合度から、全体を五つの段階に分類した。これは複合成分が自立した語と等しい意味内容を保っているか、それとも形式化して単なる接辞に成り下がってしまったかを計る目安ともなる。扱った小項目は以下の通り。

- 一、量的に見た複合動詞
- 二、複合に関する調査の方法
- 三、複合の意味関係と複合度
- 四、語義結合から見た複合動詞の階層性
- 五、意味記述への提言

3、動詞慣用句における語義結合の問題

慣用句が句全体で一つの動詞相当の文法的働きをするとき、それを「動詞慣用句」と呼ぶ。当然、名詞や形容詞・副詞相当の慣用句もあるわけである。本節では動詞慣用句を句形態に添ってこれを記号化し、各句形式ごとにその所属慣用句の意味結合の緊密度を、種々の文法的検証事項に基づいて調査し、語義結合の粗密度によって、意味から見た慣用句の階層性を明らかにした。扱った小項目は以下の通り。

- 一、意味結合から見た慣用句の階層性
- 二、文型から見た動詞慣用句

三、語義結合における粗密度測定法

4、慣用句の形式と意味構成

ここでは前節を受けて、慣用句を慣用表現・慣用化された言い方一般にまで広げ、全体を文論・品詞論の観点から記号化し、それぞれの部分間の意味結合と句全体の表す意味との関係から、扱った慣用表現全体を十一の類に分別した。当然「動詞慣用句」の枠を逸脱してしまっているが、慣用表現全体を見渡すことによつて、動詞慣用句の意義も明瞭になるものと信じたからに他ならない。扱った小項目は以下の通り。

- 一、慣用句とは
- 二、慣用句の採集
- 三、慣用句の句形式の分類
- 四、慣用句の限界
- 五、慣用句の分類

第五章 動詞を中心としたとりたて句の意味

この章では、いわゆるとりたて動詞と呼ばれるもののうち、補足語中にあつて格助詞との語順の先後関係が自由なグループの中から、特に「ぐらい・ほど・ばかり・だけ」の四語を選んで、それを伴う句の意味・用法を観察する。これらは格助詞との結合関係の多様な、意味的にも多岐にわたるものゆえ、意味論的見地からその文法的特色・類義語との意味比較を行うことは極めて意義深いものと思われる。動詞研究とうたつてはいるが、本章では、特に動詞に係る句にのみ限定せず、広く形容詞や形容動詞に係る句、さらには「

の」を伴つて体言にかかわつていく形式等をも含めて眺めていくこととした。とりたて動詞の種々相は、動詞文のみライトをあてるだけでは十分ではないとの見解からである。

- 1、とりたて動詞ととりたて句
ここではいちおう「とりたて動詞」と呼ばれるものの特徴を概観し、以下の2・3で扱う事項の内容について、動詞の枠を外れることの正当性を説明する。

- 2、「ぐらい・ほど・ばかり」を伴う句の意味
右に記した三語および次の3で扱う「だけ」を加えて、その辞書的意味の異同から、それを含む句の意味をまず三十一の項に類別する。次に、そのそれぞれを「先行語の品詞性」「それを含む句の文成分」の二点から採集用例を類別し、出現度数を調査した。以下、右の調査結果にしたがつて各項ごとに意味論・文法論上特記すべき点を逐次観察する。とりたて句は、日本語の中でも、特に意味と文法との関わり、互いに連動しあう姿が極めて鮮明に現れる部分であると考えたからである。終わりに用法と意味との関係からこれら四語を含む句を統一的に分類した。扱った小項目は以下の通り。

- 一、問題の提起
- 二、「ぐらい・ほど・ばかり」の用法調査
- 三、「ぐらい・ほど・ばかり」の意味的・文法的特色
- 四、文型から見た「ぐらい・ほど・ばかり」の分類

3、「だけ・ばかり」を伴う句の意味

前節2を受けて、まったく同様の方法で「だけ・ばかり」を伴う句を分析分類した。観察事項・分析事項は、多くは類義表現を持つ句同士の比較であるが、たとえば「〜」だけで「〜」だけで「〜」の意味論的相違を指摘し、他の格助詞との結合関係では、語順の違いが意味論的相違を来さないという発見は、極めて重要な指摘として、後になつて、久野 暉・奥津敬一郎・沼田善子らの諸氏によつて、その重要性が再認識された。語や句の意味決定・意味分類が、その語の置かれた文中での位置、語同士の結合関係や共起関係によつて決められる——つまり意味と文法との因果関係を見る研究態度の一つの実行である。これはこの章だけの在り方ではなく、本書の一連の研究すべてについて言えることだと思ふ。この節で扱った小項目は以下の通り。

一、問題の提起

二、「だけい ばかり」の用法調査

三、「だけい、ばかり」の意味的・文法的特色

四、文型から見た「だけい、ばかり」の分類